

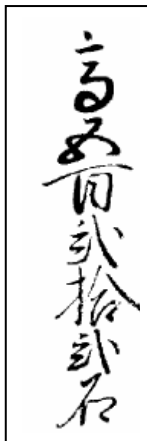
数字を読む

願書などには数字は余り出てきませんが、年貢関係の資料とか明細帳、帳簿関係の史料には数字が頻出します。まず旧字体の数字ですが、「壹」「壹」(一)、「弐」「貳」(二)、「拾」(十)、「廿」(二十)、「萬」(万)くらいしか頻出する旧字体の数字はなく、あとは現在と同じ漢数字です。したがって「陸」(六)とか「捌」(八)とかは、(古代の文書を読むなら必要ですが)覚える必要がありません。

右は、第1回に出てきた「原宿の助郷30ヶ村」の村高の合計ですが、最初の「一」は「一(ひとつ)」です。次の「高」は第7回に「諸色高直(値)」で出てきました。「高」です。今回の場合は、村高を表しています。次からいよいよ数字です。「一」は「壹」、「万」は「萬」、「弐」は「貳」、「五」は少し読みにくいですが、「1万2」と来ているから「千」、「八」は「八」、「百」は「百」。

数字を読んでいるとわかっていれば、もっと崩してあっても想像できます。「六」は「六」、

「拾」は「拾」、次はまた八で、最後の「石」は「石」です。これは、石高制といって土地の価値を米の量に換算して量ったからで、1石 = 10斗 = 100升 = 1000合(その下は「勺」「才)」です。石は今では余り使いませんが、「五合炊きの炊飯器」、「一升瓶」、「一斗樽」など他の単位は今でも使います。なお、「俵」という単位もありますが、明治以降は1俵 = 4斗です。



左も数字ですが、最初の「高」は「高」。次の「五」は、おそらく数字では一番難しいと思いますが、「五」です。「五」の次は「百」、「弐」は「貳」、次は「拾」、次は再び「弐」、最後は「石」です。

数字がよく出てくるのは、このように度量衡を表す場合の他に、年号を表記する場合に出てきます。そこで、最後に年号も読んでおきましょう。

右は、「天」は「天」、「保」は「イ」に「呆」という感じなので「保」です。「天保」という元号は「天保の改革」などでお馴染み

みでしょう。次の数字は「七」。次の「丙」と「申」は干支で「丙

(ひのえ)、「申」(さる)」と読みます。「年」はこの字だけ出てきたら、読みにくいですが、「年」しかありません。多くの場合「元号-干支-年」という順序で書かれます。日付は「九月十九日」。なお、しばしば「九月 日」のように日に数字が入っていない文書を見かけます。

